

ぼくの使命

高崎市立南八幡小学校 六年 宮下 周

「ありがとうな、周。うれしい。」

病室でおじさんは、白いノートにペンでこう返事を書いた。いんとうがんという病気で、手術をしたおじさんは、声が出せなくなり話せなくなった。ぼくはおじさんのノートに、「今度の例大祭で獅子をかぶるんだ。」と書いたら、まだ痛々しい姿でおじさんはニコニコうれしそうに笑っていた。

ぼくの住む町には古くから伝わる「獅子舞」という先人たちが守り、受け継いできた伝統芸能が存在する。この獅子舞は、高崎市重要無形民俗文化財に指定されていて、大変価値のある尊いものだとぼくは思っている。おじさんは、昔、途切れていたこの芸能を復活させた中のひとりで踊りの師匠でもある。高齢になった現在でも度々練習に顔を見せては、子供たちに手取り足取り踊り方を指導していた。

この芸能は、地域の子供たちにとって受け継がれてきた。笛は男女共、ふくことができるが、踊り手は男子のみ、などの昔ながらのルールも存在する。実際、ぼくの母は笛として、母の弟であるぼくの叔父二人は、踊り手として、入っていた。また、ぼくの母たちの時代は地域のたくさんの子供たちがこの獅子舞に入っていて、踊り手も交代するほどだったという。

そして今、ぼくらの時代はどうだろう。地域の祖先に守られ伝承されてきた価値ある芸能は今、危機を迎えている。一番の原因は「継承者不足」だ。子供の継承者不足から、子供が舞う獅子は大人が舞う獅子になる時もあったり、昔からのルールでは三人で踊るところを一人に、という風に本来の形を変えざるを得ない時もあるようだ。師匠にあたる継承者の中には、「本物の芸」の伝承について不安に思う意見もあるかもしれない。しかしこれから先、獅子を舞いたいと思ってくれる子供がいないと、この価値ある文化財は時代の変化によって埋もれていってしまうのではないか。それだけではない。子供たちに踊りを伝えてくれる師匠たち、世話人さんたちは高齢の方が少なくない。ぼくのおじさんも、練習に姿をあらわすことはきつともう、ないのだろう。

あの日病室で、ぼくは目に見えない「たすき」を受け取った。たすきを大切に守りながら長い長い距離を走ったおじさんは、ぼくにそのたすきを渡し、「ポン」と背中を押したのだ。

先人たちから伝承されてきた尊いものを、これから先も変わらず守っていくことはそう簡単なことではない。たくさんの課題だらけだ。この「たすき」にこめられた、共通するたった一つの願いがあるとしたら、それは今、ぼくも同じ気持ちかもしれない。

後世につなぐその日まで、今度はぼくが走る番だ。

「おじさん。見ていてね。」